

I

1. 下線部を次の文の内容を含めながら、言葉を使うときに人の頭にあるのが定義ではなく、何なのかを説明することが求められる問題であった。しかし、意図した箇所ではなく、次の段落、または文章全体の内容をまとめようとした答案が多く見られた。特に多かったのは、(「ペンギン」を例にとることは間違いではないものの)人々がそれぞれ違うペンギンのイメージを持つというに留まった答案である。また正しく該当箇所を答えようとした答案においても、“properties”、“associations”の意味を正しく理解していないものが見られた。
2. 全体的によくできていた。文脈に応じて自然な日本語に訳されているかどうかを評価した。第1文目後半には“they do”、“almost nobody does”といった表現が出てくるが、“they”が誰を指すのか、“do”や“does”で表される内容が何かを理解し、訳すことが自然な日本語に訳すポイントである。第2文目は文ごと訳し忘れていた解答が散見された。
3. 下線部の研究でどのようなことが明らかになったのか、その内容を説明する設問である。that節の“the concepts”と“for words”の関係が正しく捉えられていないため、正確な説明になっていない解答があった。説明を求める問題に関しては、下線部に関係する部分だけを読むのではなく、文章全体で述べられている内容を理解した上で、日本語にまとめる工夫をするとよい。“uncle”という具体例についての記述を解答に含めてもよい。“For a four-year-old”を「おじ」のことに誤解した解答も見られた。“for”の基本的な用法について理解しておいてほしい。
4. 下線部の構造と“they”の指示内容を把握し、その前後の文脈を理解したうえで、具体例を含めて説明することを求める問題である。全体的によくできており、多くの解答は文章の意図することを読み取れていた。しかし、少数ではあるが、下線部の“amount”を動詞ではなく、名詞と解釈して、「量」と訳していたり、下線部のみを訳していたり、パラグラフ全体をまとめていた解答もあった。
5. 各文の構造を的確に把握したうえで、文脈に応じて内容を適切に理解し、自然な日本語で訳されているかどうかを評価した。第1文は、可能性・推量を表す“could”を含め、概してよく把握できていた。第2文については、“common nouns”と対照される“abstract words”に生じる状況に関するものであること、及び、後半の入組んだ文法的修飾関係を、正しく理解できていないと思われる解答が見られた。

II

標準的な英語の構文や語彙を用いて、個人の思考や経験を適切に表現しているかという観点から総合的に評価した。エッセイの構成に関しては、「2つの理由から、私はこう思う」という類のものが多数であった。表現を繰返し、単純化しているものは減点の対象とした。全体としては、概ね適切に書かれており、独創的で、興味深いものも少なくなかった。